

児童が考え合う場をつくるための手立てについて

高度学校教育実践専攻

教員養成特別コース

前川 勇 太

キーワード：考え合う、問い返し、

実習責任教員 藤原 伸彦

実習指導教員 末内 佳代

1. 基礎インターンシップにおける実践

基礎インターンシップでは、N小学校第4学年（33名）を対象に、算数科「がい数とその計算」（4/6時間）の授業を行った。本授業の分析を通して、児童が考え合う手立てを考えなければならないことがわかった。考え合う手立てとは、①物理的に考える時間そのものを確保することと、②確保された時間の中で児童が考えられるようにすることである。この2つの考え合う手立てを機能させるために次の3点について改善が必要だと考えた。

- ・教師の思い込みでの教材研究
- ・適切でない発問
- ・既習事項の理解確認

(1) 教師の思い込みでの教材研究

教師の思い込みで、児童が「○○のように考えるだろう」と教材研究を行うのではなく、児童の様子や理解度、得意や苦手などをもとに教材研究を行い、細かなところまで指示を考える。そのようにすることで、その授業で一番児童に考えてほしいところに、多くの時間を確保することができると思う。

(2) 適切でない発問

教師の発問が適切でなかったため、児童は授業内で一番ポイントとなることについて考えることができなかった。ポイントとなることを児童が考えるような発問をつくとともに、その

発問が児童に明確に伝わるようにする必要があると考える。

(3) 既習事項の理解確認

発問が活きるための準備段階として、既習事項の理解確認や、場面設定などを整える必要がある。発問が問いとして機能するような準備を行うことで、児童は見通しをもって考えることができる。

2. 総合インターンシップ I における実践

総合インターンシップでは、N市D小学校第6学年（29名）を対象に授業を行った。児童の観察記録をもとに授業を行った。授業実践の内容は次の通りである。

●実践1：社会科『武士の政治が始まる』

本時（1/4時間）では、「武士の館の図」より武士の生活から気付いたことをノートに書き、全体で気付いたことを発表した。それらを分類して板書するとともに、「領地」「争い」「自給自足」「質素」の4つのキーワードを考え、それぞれがどのように関係しているのかを児童が考えることができるようにした。武士がどのようにして台頭し、力をつけてきたのかを理解できるようにした。

○手立てと成果

【手立て①】観点別に分けた板書（図1）

児童の気付いたことを4つの観点に分けて板書視覚化することで、気付いたことがどのようなキーワードで表すことができるのかを考え

られるようにし、かつ4つのキーワードの関係性を考えることができるようにした。視覚的にわかるように、整理して書くことで、児童も気付いたことがどのような関係があるのかを考え、キーワードに表すことができていた。しかし、4つのキーワードがそれぞれどのような関係があるのかを考えることは、黒板の情報だけでは、難しい様子であった。

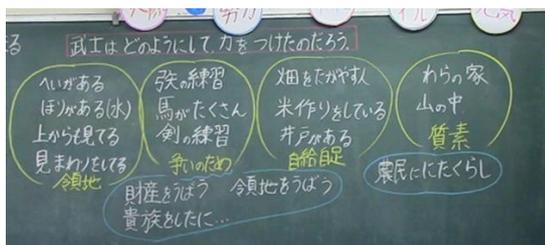


図 1 観点別に分けた板書

○ 課題

(1) 具体的な指示と提示

児童に「武士の館の図」から気付いたことをノートに書くように指示をする際、人物、建物、周りの様子と読み取る視点を提示した。しかし、結局全てのこと提示してしまった。人物なら人物の様子や動きなど「人物」に焦点化して読み取ることができるようにすれば、資料の読み取りが苦手な児童もひとつ以上は書くことができたと考える。

(2) 全体への共有の手立て

児童が気付いたことを他の児童に広げず、児童と教師のやり取りの繰り返しになってしまった。考え合う場をつくるのであれば、他の児童の考えも「みんなはどう思う」と全体に問い返すことで、児童の気付いたことと武士の関係を考えることができた。このように、他の児童の気付きも自分ごととして、考えることができるような手立てが必要であったと考える。

(3) 資料の活用のタイミング

児童が黒板に整理したキーワードが、それぞ

れどのような関係があるのかを近くの人と考える際、ほかに何も資料を提示せず、板書のみで考えるようにしてしまった。このとき「教科書・資料集も用いて調べてもよい」と指示を出していれば、自分たちで調べて根拠を示しながら、事実をもとに考え合うことができたと考える。

3. 総合インターンシップⅡにおける実践

●実践2：社会科『新しい時代の幕開け』

本時(10/10時間)では、「明治政府は改革・制度を作って、どんな国にしたかったのか」について個人で考えた。①「明治政府はどのような国にしたかったのか」②「その理由は何か」③「理由に改革・制度を用いて文にして説明」この3つについて考え、意見を出し合う中で、「明治政府が目指した国づくり」について考えるようにした。

○ 手立てと成果

【手立て②】全体への問い返し

児童から考えを聞くとき、教師と児童だけのやり取りになるため、全体に「みんなはどう思う？」と聞いた。周りの児童も自分ごとのように考えることができていた。教師が児童の考えを全体に広げることで、みんなで考えることができることがわかった。

【手立て③】具体的な指示と提示

児童に活動を説明する際、大型提示装置を用いて、視覚的な提示を併用しながら説明を行った。また、どのようにノートに書くのか例を示した。しかし、児童は理解できていない様子であった。

○ 課題

(1) 活動の単純化

【手立て③】を行ったが児童は理解できていなかった。要因として、活動そのものが複雑であったことが挙げられる。活動として、①～③を

考えるようにしたのだが、児童は1度に3つのことを同時に児童は考えなければならなかった。また、「明治政府が目指した国づくりと政策の関連性」についても考えなくてはならなかった。4つのことを同時に考えることは複雑であったため、活動を簡単にする必要があった。

(2)『少し』の話し合いの時間

全体に共有する際、全体に聞いたとしても、課題の内容やクラスの状況によっては、考えられるわけではない。その場合に、30秒～1分程度の『少し』の話し合う時間を設けることも必要であるとわかった。近くの人と自由に話すことで、新たに考えを知れたり、自分の考えに自信をもてたりすることができる。

●実践3：社会科『新しい時代の幕開け』

本時（10/10時間）では、実践2の活動を単純化するように授業改善し相学級（29名）で行った。実践2の活動を順序だてて行った。まず「明治政府がどのような国にしたかったのか」を考え、その理由を黒板に提示した政策から選ぶようにした。また、個人ではなく班（4人）で考え、B4用紙1枚にまとめ、全体で考えを共有した。

○手立てと成果

【手立て④】活動の単純化とその説明

活動が単純化され、説明も端的に行うことができた。スライドを見れば何をすればよいのか、わかりやすかったと考える。「活動の目的」と「方法」をより明確に端的に示すことができれば、児童はより理解しやすく行動しやすいことがわかった。

【手立て⑤】資料を活用するタイミングI

①「明治政府はどのような国にしたかったのか」が決まると、班で考える際、教科書・資料集を用いて調べていくことができていた。資料

を活用するときは、児童が活用する目的をつかんでおり、その手段として提示することが有効的であるとわかった。

○課題

(1)揺さぶりをかける手立て

班での考えを児童が発表した後、周りの児童の反応がなかった。このとき、教師から「本当にそうなの？」と周りの児童に揺さぶる発問を行うことで、児童に考えるきっかけを与えることができたと考える。児童同士のやりとりを教師が促すことも、必要であるとわかった。

(2)掲示するときのグループ化

黒板に班の考えを掲示する際、似たような考えの班を固めて掲示し、その中での違いにも注目できるようにする。視覚的に違いが分かるようにし、疑問をもたせることで、何が違うのかを考えることができる。掲示の仕方も「全体への共有の手立て」であることがわかった。

●実践4：社会科『近代国家に向けて』

本時（7/7時間）では、「条約改正は何が影響してできたのか」について、「政治」「戦争」「国内の発展」「外国と交渉」の4つの立場から選び、同じ立場の人と少人数のグループに分かれて話し合い、全体で意見を出し合った。また、バロメーター（図2）に表すことで、児童同士で話し合い、考え合うことで、授業前後の自分の考えの変化がわかるようにした。

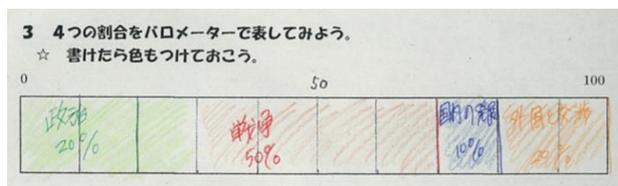


図2 ワークシート内のバロメーター

○手立てと成果

【手立て⑥】『少し』の話し合う時間

全体での話し合いが止まり、授業の流れが止

まったときに、1分間のグループで話し合う時間を設けた。その後、どのグループもサッと、課題に対して話し合ったり、調べたりしていた。この話し合いの後、児童同士で質問を行い、それに対して反対意見を述べ、他の児童も発言するなど、話し合いが活発になった。

【手立て⑦】資料を活用するタイミングⅡ

グループで話し合う際、教科書・資料集を用いて、「他の立場の人が納得できるように」と指示を出して調べるようにした。児童は、他のグループが納得するような根拠や理由を調べたり、考えたりしていた。単に調べる手段を提示するのではなく、目的を示すことで、調べる意味をもたせることが大切だとわかった。

【手立て⑧】バロメーター

授業の前後にバロメーターに4つの立場の比率を書くようにすることで、授業後の自分の考えの変化がわかるようにした。(図2)話し合いから、他の立場の考えを知り、考えが変わった児童もいれば、変わらず自分の考えを強くもった児童もいることがわかった。みんなで話し合い、考え合うことで、児童は、他の考えに触れながら選択・判断を行い、自分の考えをさらに良いものにしようとするのがわかった。

○ 課題

(1) めあての提示

めあてを提示する際、児童へ揺さぶりや、疑問をもたせたりしながら提示して、めあてをつかませることができなかつた。めあては話し合う内容と深く関わっている。話し合いの途中、めあてを再提示することで、何について話し合わなければならないのかを確認できる。話し合っている内容がめあてから逸れないように、話し合いの流れを読みながら考え合う場をつくっていくことが必要である。

(2) 指示の提示の仕方

スライドを用いて活動内容を提示する際、見出しの言葉や内容を見て誤解しないようにしなければならない。一目見ただけで何をするのかが明確な言葉を選び、補足説明も項目を少なくして提示することが必要であるとわかった。

4. 研究のまとめ

考え合う場をつくるための手立てについて、研究してきた。児童が考え合うためには、児童自身が考えをもつことができるようにすることが大切である。【手立て③】や【手立て④】によって、児童に何を考えるのかを明確にさせる必要がある。また、【手立て①】のように児童の考えを整理するような板書も必要である。さらに、教科書・資料集などを活用する際は、【手立て⑤】【手立て⑦】のように、目的を児童につかませ、調べる意味も持たせることで、効果的に調べることができる。

全体で考え合う際は、【手立て②】のように教師と児童のやりとりだけでなく、児童と児童のやりとりができるようにしていく必要がある。クラス全員で考えて解決していくことができると考える。また、ひとりで考えるのが難しそうであれば、【手立て⑥】のように周りの児童と自由に話し合う時間を取ることで、友達の考えを聞けたり、自分の考えに自信をもつことができたりしたと考える。

さらに、【手立て⑧】のように、話し合いによって、どのように考えが変わったのかを児童は、自分自身で知ることができる。話し合いから何を学んだのか、何に影響を受けたのかわかり、理解確認にもつながると考える。

今後も児童が授業で考えをもち、話し合う中で、多くの考えに触れ、考えを練り上げることができる手立てを追究していきたい。